

第一章 名物刀劍の発生

刀劍が名物になるまでには長い道程がある。その源は十柄の劍や草薙の劍であり、天皇の御劍であり、源平の武將に所縁の太刀などである。

それらの刀劍は、人智を超えた聖なるものとの繋がりがあると考えられていた。また武將たちも、聖なる刀劍に対し敬虔な思いを抱いていた。その思いが美しい太刀を生み出していった。

武家にとって、血筋を続けることは何にも勝る御家の大事であった。世継ぎの男子の誕生・元服・家督相続などの祝事は重要な行事であり、その祝儀として刀劍の贈答が行われた。

鎌倉幕府を開いた源頼朝は家来の軍功の褒賞に名刀を下賜した。御家人の家ではその刀劍を家宝として代々受け継ぎ、武家の誇りとして後世に伝えてきた。

重要文化財

黒漆太刀 号 獅子王

中身 太刀 無銘 平安時代(十二世紀)

拵 総長三尺三寸八分(二〇二・五cm)

柄長六寸(一八・三cm)

太刀 刃長二尺五寸五分(七七・三cm)

茎長五寸(一五・三cm)

鎌倉時代(十三世紀)

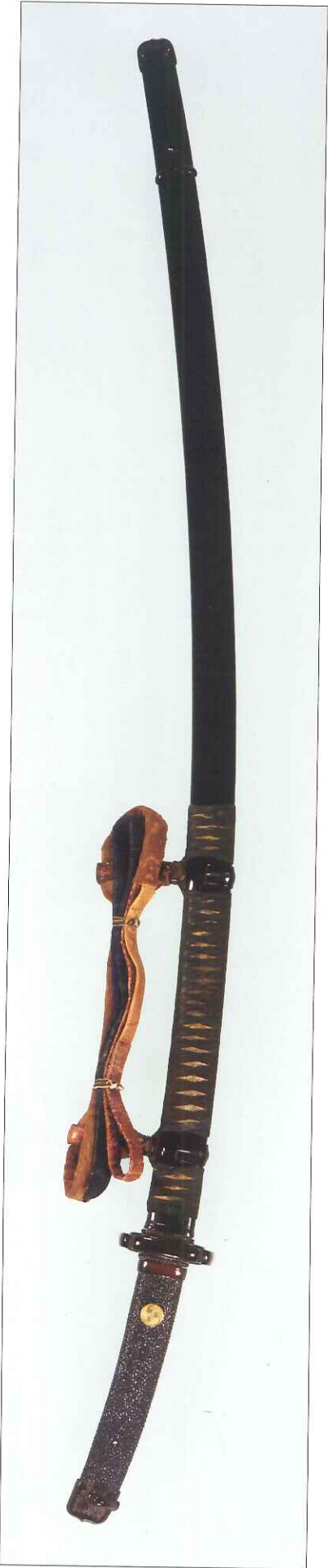
東京国立博物館

黒づくめの太刀拵は、平安時代末期の源平の武士たちが腰にする様式であつた。反りが高く、全体を薄く特に石突が細くなる。柄は鮫皮包み、鞘は黒漆、金具は山銅ですべて黒漆塗り。目貫は丸に三巴紋みつとぎもんであり、目釘の頭が目貫と一体となる古様式である。鐔は練革木瓜形四方猪目透かし、大切羽は銅木瓜形。帯取は茶革。渡り巻は緑錦包、黒糸巻き。二つの足金物の間隔が広く、石突と責金せめがねの間隔が狭いのは平安末期から鎌倉時代の特徴である。

刀身は、鑄造り、腰反り高く、鋒は鯡形。匂口の締まった直刃すくはで平安末期の様式の太刀である。

獅子王ししおうの号をもつ太刀として古くから伝えられ、その名称の由来は不詳である。源頼政(源三位、一一〇四〜八〇)が二条天皇(在位一一五八〜六五)を悩ませた鶴を射て退治したとき、その賞として鳥羽天皇(在位一一〇七〜二三)から宮中に伝わった獅子王の太刀を賜つたと『源平盛衰記』に記されている。その太刀がこれであるとして、土岐氏に伝わり、明治天皇に献上された。





黒漆太刀拵

国宝

太刀 銘 友成作

刃長二尺六寸二分(七九・三cm)

茎長六寸(一八・三cm)

平安時代(十二世紀)

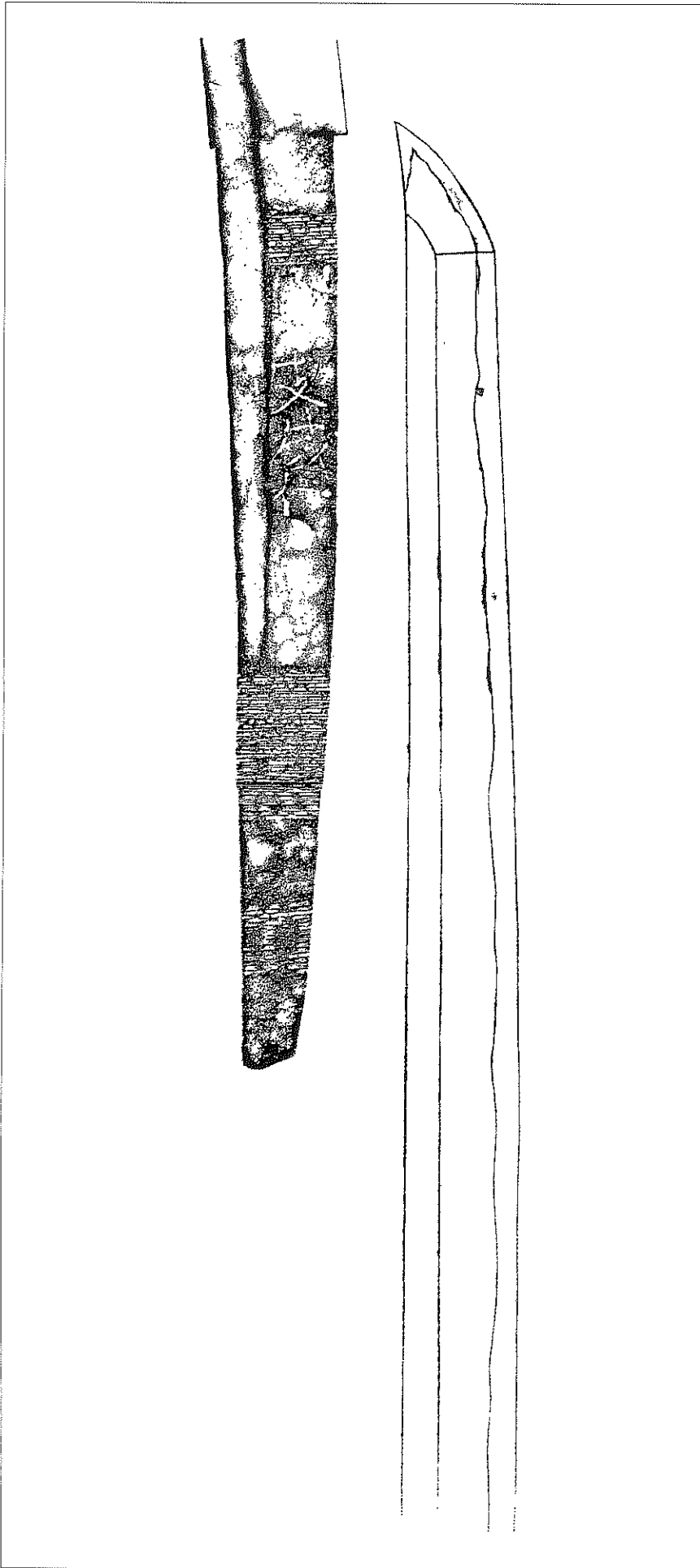
厳島神社

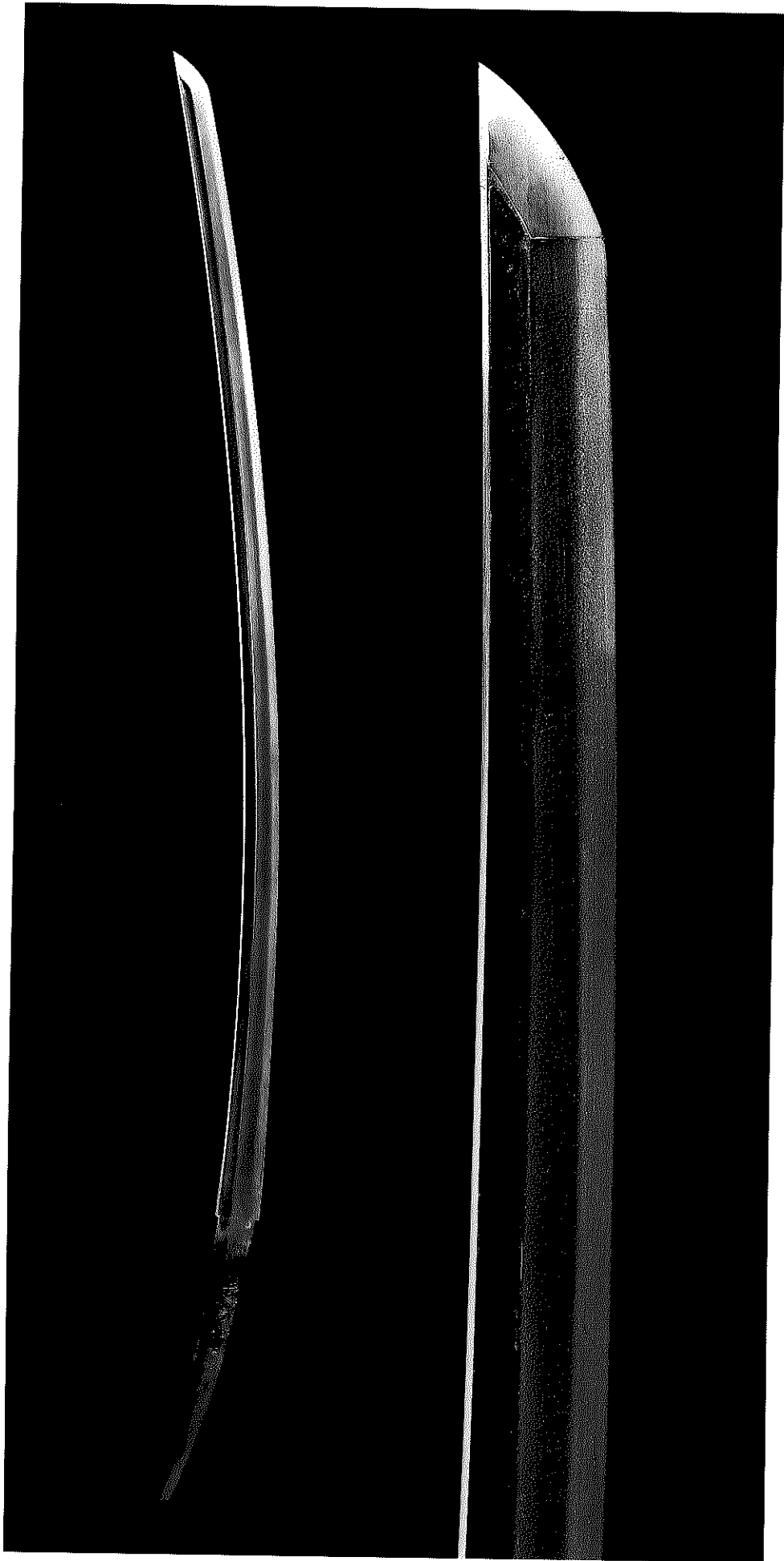
勇渾な姿の太刀である。姿は鎗造り、庵棟、腰反り高く、踏張り強く、中鋒。地文は小板目肌よくつみ、地沸細かにつき、乱れ映り幽かにたつ。刃文は直刃に丁子足入り、表に腰刃を焼き、総体に匂口縮まりごころに小沸つく。銚子はのたれこんで、先尖りごころに返る。彫物は表裏棒樋を掻き流す。茎は生ぶ、先入山形、鑢目は浅い勝手下がり、目釘孔二つ(内一つ埋め)、表目釘孔の上の平地に大振りの「友成作」の銘がある。

友成は、平安時代末期から鎌倉時代初期、備前国の名工と伝える。現在も多くの名刀が残り、本刀は製作された姿がほぼ完存して、勝れて見事な太刀である。

『厳島宝物図絵』には「平宗盛公太刀 刃長二尺六寸五分」と記載されている。また、一説には、能登守教経とも伝えているが、いずれにしても平家の武将が平家一門の尊崇する厳島神社に奉納したもので、現在まで伝世されてきた貴重な歴史の証人である。

(渡邊)



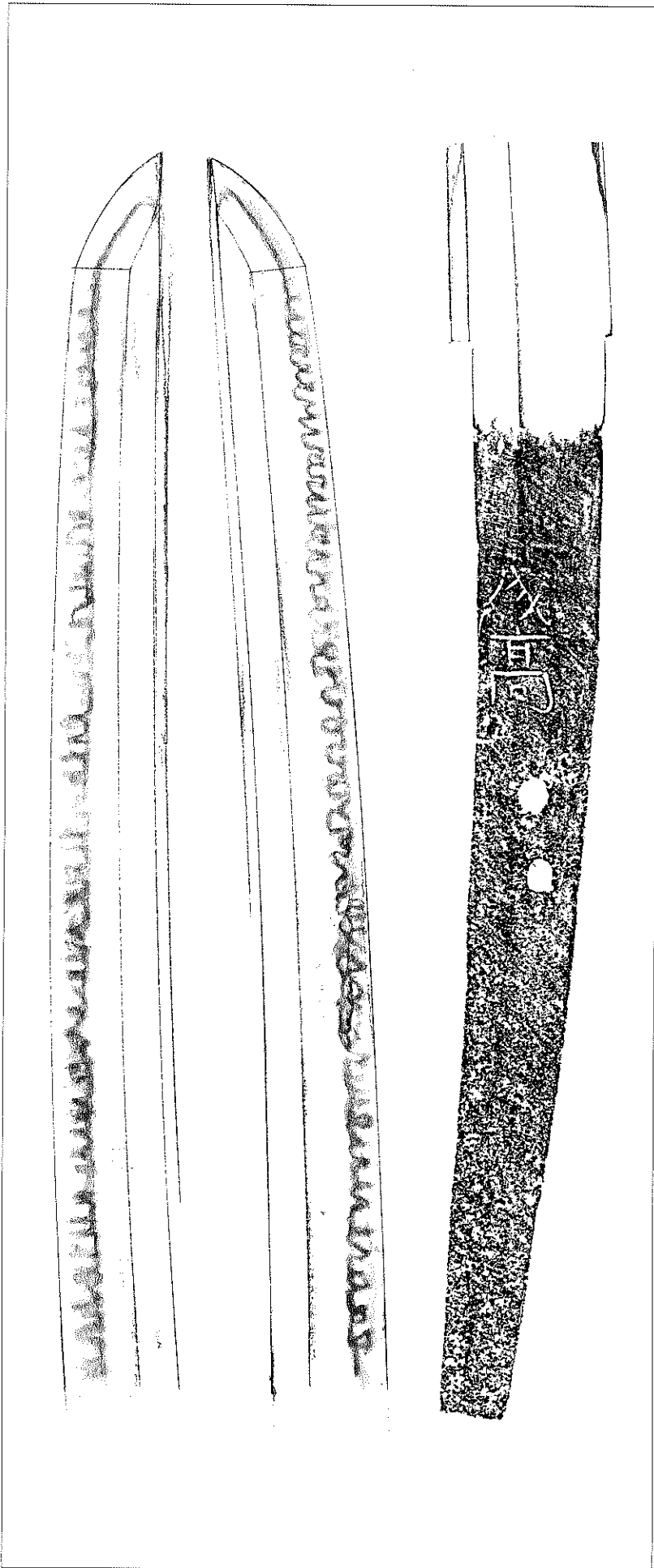


太刀 銘 成高

刃長二尺七寸二分(八二・四cm)

茎長七寸四分半(二二・六cm)

平安時代(十二世紀)



生ぶの姿をそのままに伸びやかな線の太刀である。姿は鎗造り、腰反り高く、小鋒。地文は板目肌や流れごころに、地沸つき地景入る。刃文は丁子乱れ、二重刃ごころあり、沸よくつき、足葉しきりに入り、砂流しかかる。銚子は直ぐに小丸、表わずかに掃きかける。茎は生ぶ、先浅い栗尻、鏝目大筋違、目釘孔二つ、佩表の目釘孔上の棟寄りに大振りの二字銘がある。

成高は備前国の住人であり、古備前派の刀工で、平安末期から鎌倉初期にかけて活躍したと思われる。しかし、古備前一般の作風として茎の鏝が勝手下がりとなるのが一般だが、成高は大筋違となり、他に行秀も同様であり、古備前派

のなかでは一風異なる鍛冶なのかもしれない。この刃文は直刃調に小丁子が連れて、丁子足には小沸がぼつてりとつき古備前の作風と共通する。

この太刀は、佐原義連が源頼朝から拝領したものと伝えられている。義連は相模国佐原の豪族・三浦義昭の七男に生まれ、若年から頼朝に近侍、一の谷の戦いで源義経が率いる搦め手軍に属し、「ひよどり越えの逆落とし」で尻ごみする武士たちを鼓舞して真つ先に掛け下り、また、頼朝の奥州征伐にも功績をあげ、会津の地を賜った。佐原(蘆名)一族は室町末期まで栄えたが、その後は縁の人々によつて、今日まで会津の地で守り伝えられている。



太刀 銘 成高

刃長二尺六寸五分(八〇・四cm)

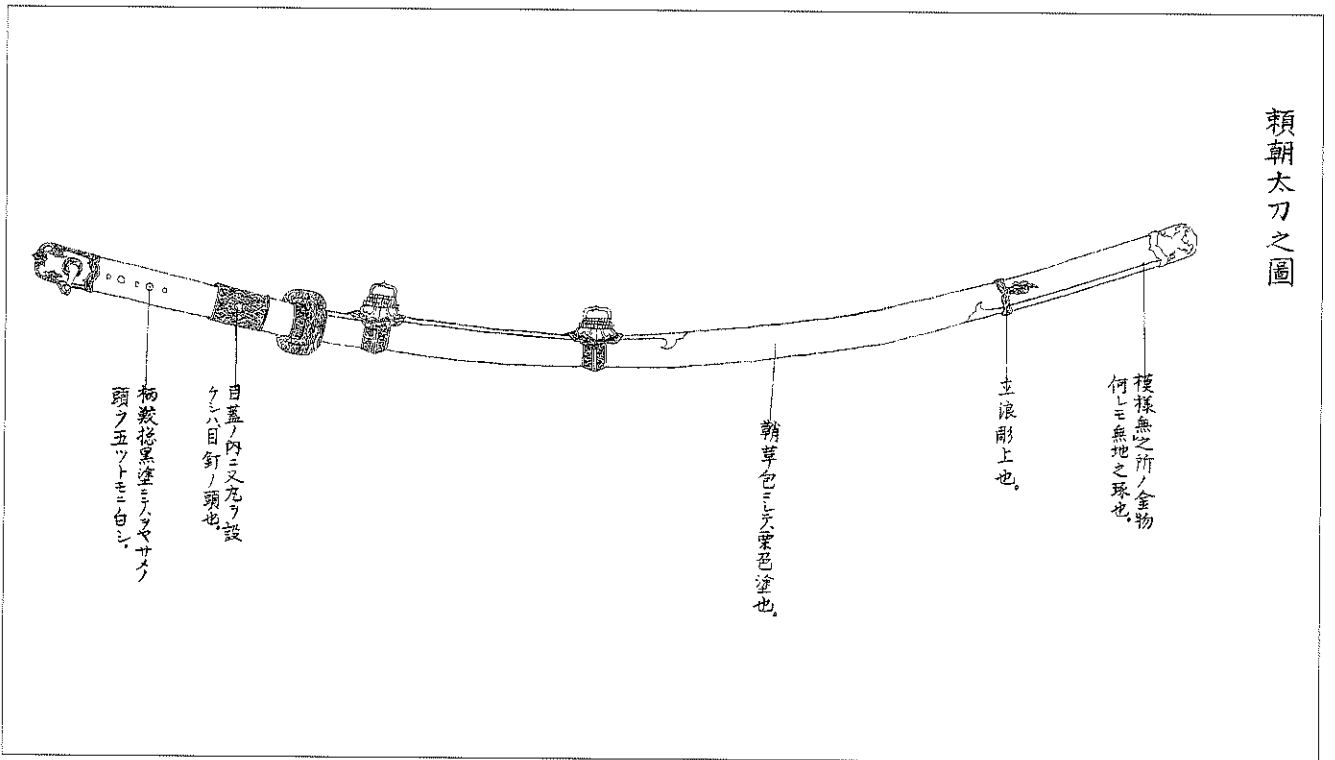
平安時代(十二世紀)

京都国立博物館

武士の心を伝えた高い品格の太刀。姿は鑄造り、庵棟、身幅やや広く、腰反り高く、中鋒やや鯨形となる。地文は板目やや肌立ち、地沸つき、地斑交じり、淡い映りがたつ。刃文は小乱れに小丁子交じり、腰元は焼幅せまく、区際で焼落とし、総体に小沸よくつき、足・葉よく入る。鍔子は焼幅広く、直ぐに先小丸。茎は生ぶ、鐔目は筋違、先浅い栗尻、目釘孔一つ、表中ほど目釘孔にかけて「成高」と大振りの二字銘がある。

この太刀は、鎌倉幕府を開いた源頼朝が、伊豆の御家人工藤祐時に与えたものである。後にその子孫が石州に在国の折益田家に贈ったことが『防長古器考 上』に記されている。工藤祐時の父祐経は、曾我五郎・十郎兄弟が親の敵とした武士で、十八年の辛苦の末兄弟は本懐を遂げる。当時、親の仇を打つことは子の義務であり道理とされていた。父を打たれた祐時は、生き残った五郎の処刑を頼朝に泣いて懇願した。そして、頼朝の側近の御家人として忠勤に励んだ。頼朝から授かった御恩の太刀を、その記録と共に八百年間守られ伝えられてきたのである。まさしくお家の重宝であった。

頼朝太刀之圖



『防長古器考 上』



重要文化財

三鱗紋兵庫鎖太刀 号 北条太刀

中身 太刀 無銘 伝一文字

鎌倉時代(十三世紀)

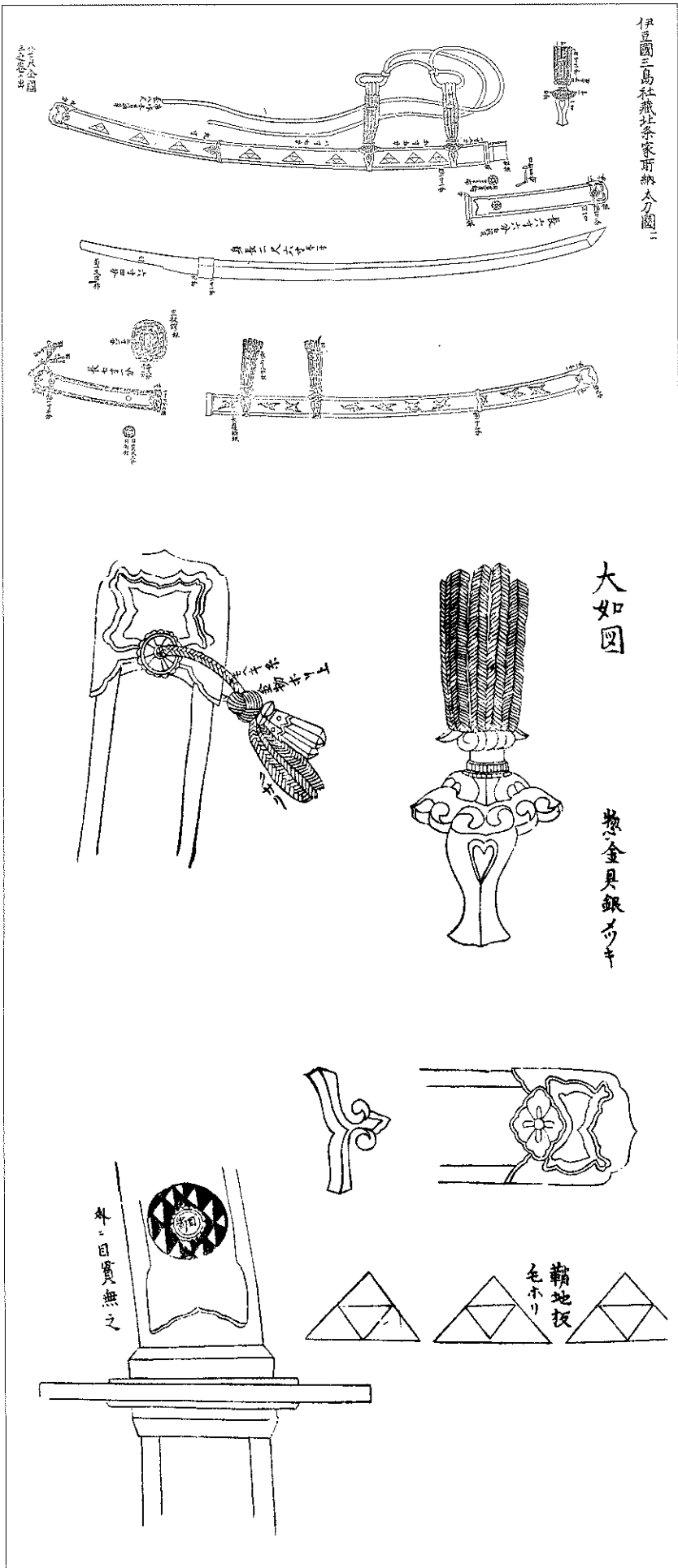
拵 総長三尺四寸四分(一〇四・一cm)
柄長六寸八分(二〇・七cm)

太刀 刃長二尺五寸五分(七七・三cm)

鎌倉時代(十三世紀)

東京国立博物館

伊豆國三嶋社藏北条家前執太刀圖

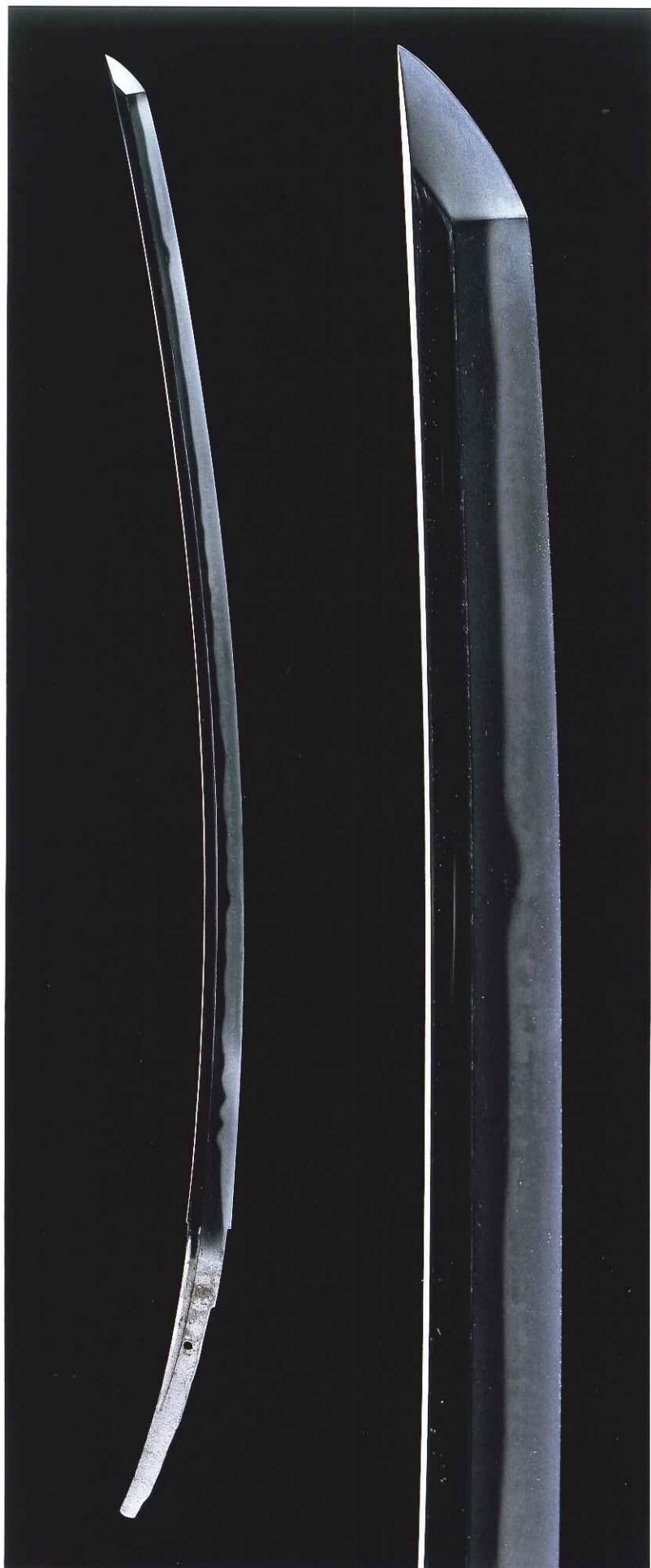


大如圖

惣金具銀メッキ

兵庫鎖太刀は、帯取が鎖となつているところから呼ばれ、平安末期から鎌倉時代に流行した。総銀造りで、厳めしさがあり、嚴物造とも呼ばれた。この太刀は、柄は白鮫包、銀の覆輪をめぐらし、銀三鱗紋の俵鍔一、双四組を打つ。鞘は三鱗紋を各間に三個ずつ線彫鍍金した銀地板を伏せ、銀覆輪をめぐらす。総金具は銀で、猿手には二条の鎖、足金物は腹帯形猪の目透かしで、笠金に唐草文を彫り、帯執は兵庫鎖四条で丸に鱗紋透かしの留め金を据える。責金は柏葉形透かし彫り、石突に四花形文を彫る。鐔は鉄地に銀包みとし、豎丸形、

無文で、大切羽は鱗紋透かし彫、小切羽は周囲小刻みである。同類中では地味ながら重厚さがある。刀身は、無銘ながら備前一文字の作で、鋒は鯰形の豪壮な姿に華やかな丁子刃文、区元に初刃が残るほど完存な作である。もと、伊豆の三嶋大社に伝来し、北条氏から奉納と伝えられ、北条太刀と呼ばれている。北条氏の中で、作品の作風から執権北条泰時を想定してみた。『集古十種』所載でよく知られ、同社より明治天皇に献上された。



三鱗紋兵庫鎖太刀拵

重要文化財

黒革包太刀 号 笹丸

中身 太刀 銘 則宗(名物 二つ銘則宗)

鎌倉時代(十三世紀)

拵 総長三尺四寸九分(一〇六・〇cm)

太刀 刃長二尺六寸四分(八〇・一cm)

茎長五寸八分(一七・五cm)

南北朝時代(十四世紀)

愛宕神社

堅牢な太刀拵に瀟洒な太刀である。太刀拵全体を革で包み、鐔にも覆いを被せている。野戦用の堅牢な太刀拵で、金具に竹笹文が毛彫りされているところから笹丸ささまると呼ばれている。

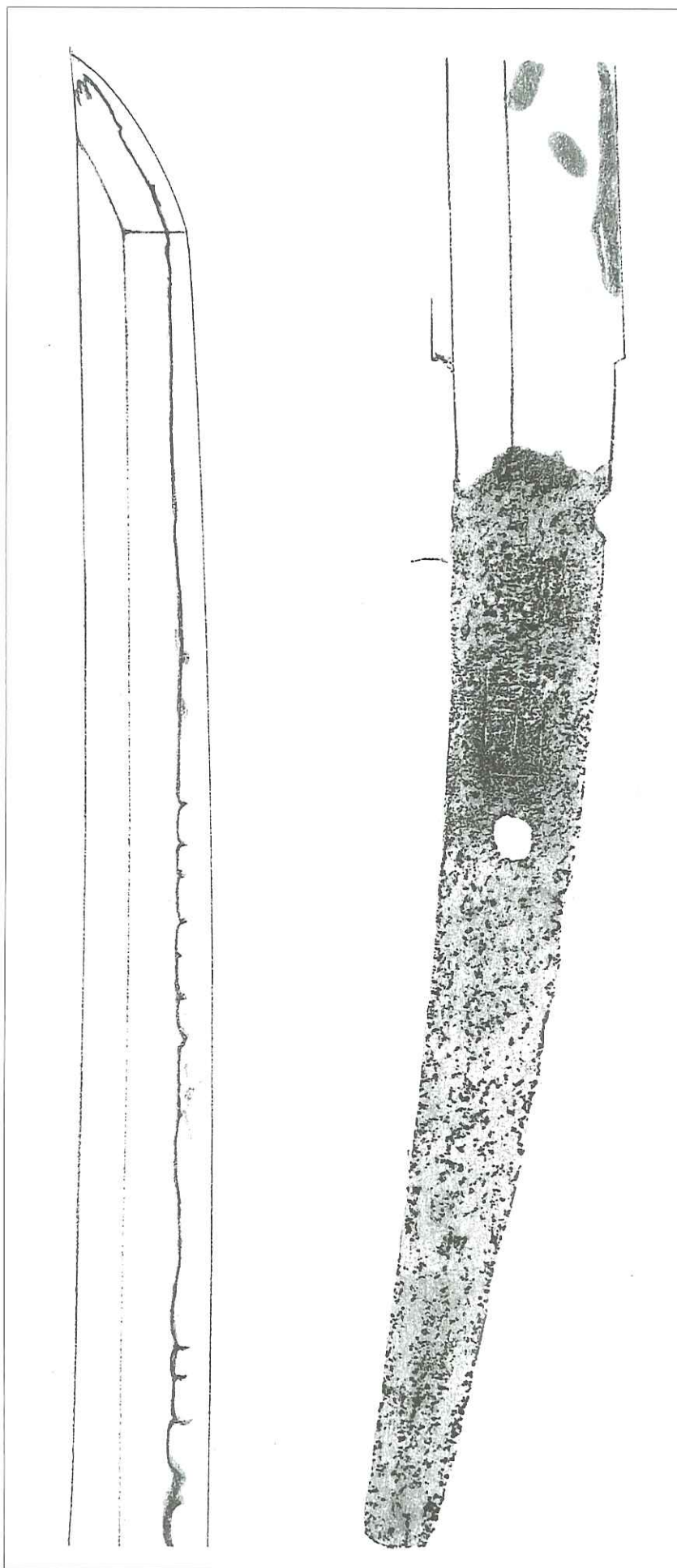
中身の太刀は、鎚造り、庵棟、反り高く腰に踏ん張りがある。先幅が細く、先は小鋒。地文は大板目流れ肌交じる。刃文は上半は広直刃に小足入り、中程は丁子乱れ逆ごころの足入り、匂口は締まるが、腰元は小乱れとなる。銚子はややのたれて、先乱れごころに返る。茎は生ぶ、刃方の茎先を細くし、鐔目は勝手下がり、目釘孔一つ。目釘孔上に「□□国則宗」と銘がある。『享保名物帳』には刃長二尺六寸八分とあり、実物はやや短い。

備前国則宗は、一文字派の創始者と伝えられ、後鳥羽院一月の番鍛冶に選抜され、京都の院に招かれ鍛刀したという。後鳥羽院の覚えめでたく、則宗の作には品格の高さが認められる。

『享保名物帳』によると、足利將軍家初代尊氏より十三代義輝へ伝え、義昭より鬼丸、大伝多ともに秀吉に進じられ、秀吉は本刀を愛宕神社へ献納した、とあり、現在に至る。笹紋は尊氏の家紋である。



黒革包太刀拵



『図説刀劍名物帳』